

日蓮における「病」と「臨終」

野 口 真 澄

古代より現代に至るまで普遍的に存在してきた「病」は、それぞれの時代・社会・宗教・文化などの価値観のもとでは、多様な意味に捕らえられてきた。日蓮に限ってみても、「病」はいくつかの意味において捕らえられていることが指摘できる。本稿では「臨終」、すなわち死に至る「病」、死への「なげき」としての「病」、という点的を絞り、日蓮の消息による檀越教化において、それがいかに克服されようとしているかを考察する。

病者に対する日蓮の教導の根本は、法華経に帰することに よる宗教的な救済が示されるというものである。その説き方は、相手の信仰のあり方や、病状によって異なっていると考 えられる。そこで、延命の希望がある場合と、まさに臨終の 迫った場合の説き方に注意してつぎに確認してみたい。

① 富城尼への教導を通して

有力檀越の一人である富城常忍の夫人である富城尼は、病に際して日蓮の教導を受けている。文永一二年二月七日の富

城尼宛の消息（『可延定業御書』昭和定本八六一～四頁）では、法華経への帰依、医術による治療、法華経による祈禱と、治病の方策が多方面から説かれている。富城尼にとって死に至る恐れがある病であったが、これに対して、延命・延寿が強調して論じられている。これに比し、約一年後の建治二年三月二七日の消息（『富城尼御前御書』昭和定本一一四七～九頁）に至ると、病はなおも快癒せず、死へのなげきが深まったことが伺われる。まず始めに、文永一二年の消息と同様に医術による治療（灸治）と、法華経への帰依が勧奨されている。さて、この教導に続き「なげきの出で来るときは」とて、病による死のなげき・臨終の心構えが教示されている。まず、異国警固番役に動員された人々が蒙古の責めを受ける様子を示し、これを法華経の行者日蓮を理由もなく迫害したために十羅刹女の責めを受けたものであると説いている。これは、法華経陀羅尼品で、十羅刹女が仏前において法華経の行者を擁護することを誓った経説に基づき、蒙古襲来の惨状を、法華経の

流布という仏意に違背する「謗法」によるものとして踏まえ
た説示である。この説示の意図は、続けて「かかる不思議を
目の前に御らんあるぞかし、我等は仏に疑ひなしとをぼせ
ば、なにのなげきか有るべき。(略)あらうれし。南無妙法蓮
華経と唱へさせ給へ。」と結ばれることにあると考えられる。
すなわち、人々が法華経に違背して苦しむ状況と、自己の信
仰の在りようを対比することで、自己の信仰を確認しより
強固なものとし、成仏を確信するように促し、富城尼のなげ
きを払拭しようとするものであったと考えられるのである。

② 高橋入道への教導

高橋入道も日蓮の有力檀越の一人であり、病に際しての教
導を受けている。建治元年七月一二日の高橋入道宛の消息
〔高橋入道殿御返事〕昭和定本一〇八三(九一頁)では、仏滅後
三時における一代聖教の付嘱を医師の投薬になぞらえて説
き、ことに末法については衆生の病が重いので上行菩薩が出
現して妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生に授けるので
あると、法華経寿量品の良医喻・同薬王品等の経説に基づ
き、良薬たる法華経の題目を開示し、さらに末法に良薬たる
法華経を弘める「法華経の行者」という立場から、疑うこと
なく法華経に帰依すべきことを教導している。ここでは、病
は「大事」とされているものの、阿闍世王の延命について触
れられさらに「一身いかでかたすからざるべき」と述べられ

ており、さほど臨終は意識されておらず、延寿・延命への望
みが説かれている。ところが、十四日後の同月二六日にその
夫人に宛てられた消息〔高橋殿御返事〕昭和定本一〇九三(四
頁)に至ると、病状が悪化したらしく、臨終を意識した教導
がなされている。この消息は、夫人からの食物の供養に対す
る札状である。法華経法師品の経説を文拠に法華経の行者を
供養した高橋夫妻の功德を強調している。この功德に対比し
て、日本国の人々は、一人も残さず日蓮の敵となり、仏天の
責めを受けて、老岐・対馬が蒙古襲来を受けたように苦しん
でいるのはどういふことか考えてみるよう説いている。①で
富木尼に説示されていたと同様に、人々は法華経に違背する
ために苦を受けているとの認識が示されている。この後に高
橋入道の病について「なによりも入道殿の御所労なげき入て
候。しばらくいきさせ給ひて、法華経を謗する世の中御覧あ
れと候へ」との教導がなされている。夫人を通しての教導で
あることと、「しばらくいきさせ給ひて」との説示から確実
に死期が迫っていたことが伺われ、臨終に際する教導である
ことがわかる。先に確認した富木尼への教導と併せて考える
ならば、法華経を謗する世の中における自己の存在を認識せ
しめ、強固な信心と救済の確信を促した説示と考えられる。

③ 疫病流行に際しての教導

日蓮在世中において建治三年より弘安元年にかけて疫病が

大流行している。弘安二年一月六日の消息(『上野殿御返事』昭和定本一七〇七～九頁)に「去年去々年のやくびやうに死し人々のかずにも入ず。」とあり、人々に疫病による死の恐れがあったとが伺われる。弘安元年六月二六日の富木入道宛の消息(『富木入道殿御返事』昭和定本一五一七～二二頁)では、「御消息曰、凡、疫病弥興盛等、云云。」と疫病流行の便りをきつかけに法門が開示され、あわせて臨終に際する心構えが示されている。すなわち病には、四百四病の身の病と、三毒・八万四千の心の病があり、そのうち心の病には仏滅後の三時に従って軽重があり、その軽重に相応した薬としての教法が用いられるべきことが示され、結論として末法相応の教法は「本門一念三千」であることが開示されている。このなかで「実教の行者をあだめば、実教の守護神の梵釈・日月・四天等其国を罰する故、先代未聞の三災七難起るべし。所謂去今年、去、正嘉等の疫病也。」と疫病の原因は法華経違背にあることを述べている。さらに『摩訶止観』の「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起るる」(会本第五ノ一 三左)との説示をもとに、三障四魔である修行者の難の大小をもってその行法の勝劣を決している。すなわち天台・伝教と自身とを対比し「観念すでに勝る故、大難又色まさる。彼は迹門の一念三千、此は本門、一念三千也。天地はるかに殊也こと也と御臨終の御時は御心へ有るべく候。」と消息を結ぶのである。疫

病の流行という死の恐怖にさらされた富木入道に、日蓮を非難する人々のあり方から、逆に自身が帰依している教法が非常に勝れていることを確信して死に臨むよう教導した説示といえよう。

以上、「病による臨終」に対する日蓮の教導について、三つの例を確認した。このことは、仏教の大目的である生死の克服をどう踏まえていたかという範疇に含まれる。日蓮においては、法華経という仏陀の本意に従って生きること、それにともない臨終の後には法華経の浄土に詣でることができるといふ確信を得ることが生死の超克であったといえるであろう。このことが、病に際しては、①での「かかる不思議を目の前に御らんあるぞかし」、②での「法華経を謗する世の中御覧あれ」、③での「天地はるかに殊也と、御臨終の御時は御心へ有るべく候」という説かれ方をしていた。これらの死に臨むための教導は、状況認識せよということにおいて共通する。日蓮においては、謗法が充満する状況における自己の信仰を確信せしめることこそ、臨終に際する覚悟と後生に向けての安心を与えることであったと考えられるのである。

〈キーワード〉 日蓮、病、臨終

(日蓮教学研究所研究員)